

われわれは、ヨーロッパにおける社会主義の勝利に賭ける

われわれは、いまでは、1917年10月25日くらい、祖国防衛論者である。われわれはこの日くらい、祖国擁護に賛成である。というのは、われわれは**実際に**、われわれが帝国主義と絶縁したことを証明したからである。われわれは、汚らわしく、血なまぐさい帝国主義的陰謀の諸条約を破棄し、かつ公表した。われわれは**自国**のブルジョアジーを打倒した。われわれは、**われわれによって**抑圧されていた諸民族に自由をあたえた。われわれは人民に土地をあたえ、労働者統制をあたえた。われわれは、ロシア・ソヴェト社会主義共和国の擁護に賛成する。

しかし、われわれが祖国擁護に賛成であればこそ、われわれは、国の国防力と戦闘準備とに、**慎重な態度**をとることを要求する。われわれは、革命戦争という革命的空文句に、容赦ない戦いを宣言する。革命戦争の準備は、国の経済的高揚、鉄道の整備（というのは、それなしには、現代戦はまったくの空文句だからである）、全国いたるところで、もっとも嚴重な革命的規律と自己規律の回復をはじめとして、長期にわたり、真剣にやらなければならない。

軍隊も持たないことを意識しながら、途方もなく強大な、しかも準備のできている敵と戦火をまじえようとするのは、祖国擁護という観点からいって犯罪である。われわれは、祖国擁護の見地からは、このもっとも苛酷な、抑圧的な、残虐な、恥ずべき講和に調印しなければならないが、しかし、それは帝国主義に「降伏」するためではなく、慎重な、実際の仕方でこれとたたかうことをまなび、これとたたかう準備をするためなのである。

この一週間は、ロシア革命を、世界史的発展のはるかに高い段階に引きあげた。歴史はこの数日間に、数段階も高いところへ一挙に前進した。

いままでは、われわれの前に立っていたのは、低能なロマノフや、自慢屋のケレンスキーや、士官学校生徒とブルジョアの徒党といったような、見すばらしい、卑しむべくあわれむべき（世界帝国主義の見地からみれば）敵であった。いまわれわれのまえに立ちはだかっているのは、文化のすすんだ、技術的には第一級の装備をほこる、組織的にりっぱに整備された世界帝国主義の巨人である。これとたたかわなければならないのだ。これとたたかう**能力**をもたねばならないのだ。三年間の戦争のために空前の崩壊状態にありながら、社会主義革命を開始した農民国は、「最後の決戦」が燃えあがる時機にそなえて、なにか真剣なことをしとげる可能性をもつためにこそ、軍事的格闘を避けなければならない——たとえ最大の犠牲をはらってでも、それを避けうるかぎりには。

この「最後の決戦」は、先進帝国主義諸国に社会主義革命が燃えひろがるときにはじめて燃えあがるであろう。このような革命は、疑いもなく月とともに、週とともに、成熟し、つよまっていくであろう。この成熟していく勢力を援助しなければならない。これを援助する道を**こころえ**なければならない。隣国のソヴェト社会主義共和国を、あきらかにそこに軍隊がないような時機に、潰滅にゆだねることは、それをたすけるどころか、危害をくわえることである。

「われわれは、ヨーロッパにおける社会主義の勝利に賭ける」という偉大なスローガンを、空文句に変えてはならない。社会主義の徹底的な勝利という長期の困難な道を考慮す

るならば、このことは真理である。全体としての「社会主義革命の時代」全体を取りあげるならば、それは、争う余地のない哲学史的な真理である。しかし、あらゆる抽象的真理は、これを**どれであれ**(なんの分析もせず一青山注)具体的情勢にあてはめようとするならば、空文句となってしまう。「どのストライキのなかにも、社会革命の怪蛇(ヒドラ)がひそんでいる」というのは、争う余地のないことである。だが、どのストライキからでも、一足とびに革命へうつることができるかのようにいうのは、ばかげている。もしわれわれが、ヨーロッパ革命は、かならずここ数週間のうちに、かならずドイツ軍がペトログラードに、モスクワに、キエフに到着するまえに、われわれの鉄道輸送を「たたきこわす」まえに、燃えあがって、勝利するであろうと保障するという意味で、「ヨーロッパにおける社会主義の勝利に賭ける」ならば、われわれはまじめな国際主義的革命家としてではなく、冒険家として行動しているのである。

もしリープクネヒトが二―三週間でブルジョアジーに打ちかつならば(それは不可能ではない)、彼はわれわれを、あらゆる困難から解放してくれるであろう。それは争う余地がない。しかし、もしわれわれが、こんにちの帝国主義との闘争におけるわれわれのこんにちの戦術を、リープクネヒトがまさにここ数週間内にきつと勝利するにちがいないという期待によって決定するならば、われわれは嘲笑を買うにすぎないであろう。われわれは今日のもっとも偉大な革命的スローガンを、革命的な空文句に変えてしまうであろう。

労働者の同志諸君、きびしいがしかし有益な革命の教訓をまなびたまえ！ 祖国の擁護、社会主義ソヴェト共和国の擁護を、真剣に、緊張してたゆむことなく、準備したまえ！

第二七卷『きびしいが、必要な教訓』P54-56

『プラウダ』(夕刊)第三五号、1918年2月25日

署名——レーニン

ポイント

この「最後の決戦」は、先進帝国主義諸国に社会主義革命が燃えひろがるときにはじめて燃えあがるであろう。「われわれは、ヨーロッパにおける社会主義の勝利に賭ける」という偉大なスローガンを、空文句に変えてはならない。社会主義の徹底的な勝利という長期の困難な道を考慮するならば、このことは真理である。全体としての「社会主義革命の時代」全体を取りあげるならば、それは、争う余地のない哲学史的な真理である。しかし、あらゆる抽象的真理は、なんの分析もせずに具体的情勢にあてはめようとするならば、空文句となる。

労働者の同志諸君、きびしいがしかし有益な革命の教訓をまなびたまえ！ 祖国の擁護、社会主義ソヴェト共和国の擁護を、真剣に、緊張してたゆむことなく、準備したまえ！